

レンブラント リ・クリエイト展 2016

オランダ・レンブラント・リサーチ・プロジェクト公認

そごう美術館（横浜駅東口） 2016. 07. 30～09. 04



「レンブラント・ファン・レイ」（1606～69）は、バロック期を代表するオランダ黄金期の画家で、強い光による明暗対比や赤褐色から緑褐色を基調とした、輝くような色彩の技法を得意とした。

「リ・クリエイト」とは、専門家の監修により画伯が描いた当時の作品の色調やサイズを徹底的に検証し、経年劣化で変色する元の原色を取り戻す方法である。このテクニックでは、行方不明になった作品や、大きな損傷を受けた《夜警》をはじめ一部が切断されてしまった作品を、最新のデジタル技術で17世紀の姿へと複製画で忠実に再現することができる。

本展では世界18か国に点在する画伯の描いた当時の「自画像全41点」を含む厳選された「約200点」が集結し、時空を超えて原寸大で鑑賞することができることで注目されている。

《夜警》（フランス・バニング・コック隊長の市民隊）（ポスターの写真）

最高傑作とされる門外不出の作品は1642年に完成したが、その後アムステルダム市庁舎へ移される際に、作品の上下左右が切り詰められてしまったために全貌を見ることはできない。しかし、複製と数多くの資料を元に切断された部分も「リ・クリエイト」で再現され、描かれた当時の迫力のサイズに完全複製されたため、巨匠「レンブラント」の制作当時の作品を鑑賞することができる。

「自画像41点」



〈自画像〉1629年
ゲルマン国立博物館
©Rembrandt Re-create, Japan



〈自画像〉1642年
イギリス王室コレクション
©Rembrandt Re-create, Japan

「レンブラント」は、生涯の40年以上にわたって100点もの「自画像」を描いているが、青年期、絶頂期、低迷期、老年期で、その時々浮き沈みの激しい人生の内面が作品にはっきりと現れているのが伺える。

本展では、彼の残した「全41点」の「自画像」を通して、その表情から人生の“光と影”にも注目される。